

軽唇音化の進行過程---異化作用による解釈---

中村雅之

1. はじめに

漢語音韻史において、重唇音(=両唇音。/p/、/pʰ/、/b/、/m/)の一部が軽唇音(=唇齒音。/f/、/v/、/ɱ/)などに変化する「軽唇音化」は種々の問題を含む重要テーマのひとつである。遅くとも7世紀までに起こったこの音韻変化が、①どのような条件の下で、②どのような要因により、③どのような順序で進行したか、が問題となる。

このうち、①については趙元任の予測に基づいた平山久雄 1967a の精緻な研究により、ほぼ明らかになっている。それによれば、介音/-i-/を含み、中舌・後舌の主母音を有する音節において、軽唇音化が生じた。直音の音節においては軽唇音化は起こらず、また拗介音/-i-/を含む音節であっても前舌主母音を有する音節では軽唇音化が生じていない。拗介音を含み前舌主母音を有する音節にはいわゆる重紐の対立があり、軽唇音化を生じた音節と相補分布をなしている。

②については、後舌母音を発音する際に下あごが後ろに引かれる傾向があるとか、拗介音/-i-/が重紐 A 類と同様の口蓋的な/-i-/であったなどの案が平山氏によって提案されているが、十分に説得的とは言えない。③については、これまで論じられたものを知らない。

本稿の目的は、②と③について新たな案を提示し、長い間置き去りにされた問題の再考を促すことにある。本稿で述べようとする結論をあらかじめ要約しておくこと以下の通りである。

- i) 軽唇音化を生じさせた最大の要因は唇音声母と唇音性韻尾を持つ音節における異化作用(dissimilation)であった。
- ii) 軽唇音化は、まず流撰(/-iɿu/)と通撰(/-iɿuŋ/、/-iɿuk/) <sup>1</sup>において異化作用によって始まり、それを契機として中舌・後舌の主母音を有する拗音音節全体に広まった。

2. 漢語史における異化作用

異化作用(dissimilation)は諸言語において広く見られる現象であるが、多くの場合、散発的な現象に留まり、音韻変化を引き起こす要因となる例は少ない。日本語の「稻荷(\*inani > inari)」や「浪速(\*namipa > \*nanipa > naniɸa > naniwa)」なども、散発的であるが故に、それが真に異化によるものかどうかの検証が難しい。

しかし、漢語音韻史においては、異化は音韻変化の重要な要因であり続けた。清代まで存在した/-iai/という韻母が現代標準音に存在しないのは異化によって韻尾が脱落した(「涯」「街」など)ためであるし、元代に存在した/-uau/という韻母が後になくなるのも同様であろう。漢語における異化は音節内に「ABA」タイプの音素配列がある場合に生じる。この場合の音素「A」は狭めの要素(/i/や/u/など)で、「B」はそれと異なる要素である。本稿で扱う軽唇音化では、狭めの要素/u/と異化を起こすのは唇音声母であるが、その説明に入る前に、よく知られた類例として-m 韻尾の消失過程を確認しておきたい。

<sup>1</sup> 中古音の音韻表記は平山久雄 1967b による。

中古音では鼻音韻尾として/-m/、/-n/、/-ŋ/の三種があったが、15世紀半ば以降、北方では/-m/ > /-n/という音韻変化の結果、-m 韻尾が消滅した。その要因となったのが異化作用であった。その状況を如実に示す『中原音韻』(1324年)では、中古の-m 韻尾はほとんど保存されているが、唇音声母を持つ音節に限って-n 韻尾に配置されている(「品」「凡」など)。唇音声母と唇音韻尾の間で異化を生じ、韻尾が-m > -n と変化したのである。そしてこれが契機となって、唇音声母を持たない音節においても、-m > -n の変化が起こり、ついに-m 韻尾は消失した。

### 3. 軽唇音化の進行過程

軽唇音化においても、-m 韻尾の消失と類似のメカニズムが働いたであろうというのが、本稿の提案する仮説である。軽唇音化の条件は、平山氏が述べたように、介音/-i-/を含み、かつ中舌・後舌の主母音を有することであった。しかし、それらが一斉に軽唇音化を起こしたとすると、その理由をうまく説明することが難しい。そこで、まず/-iɿu/および/-iɿuŋ/、/-iɿuk/という韻母を持つ音節において、唇音声母が韻尾/-u/および/-uŋ/、/-uk/との間に異化を生じて両唇の調音が緩み、/p/ > /f/のように軽唇音化したと考えられる<sup>2</sup>。流撰の「浮/biɿu/」「富/pʰiɿu/」や通撰の「風/pʰiɿuŋ/」「豊/pʰiɿuŋ/」「福/pʰiɿuk/」などはその結果、/v/や/f/という声母を獲得した。その際、介音の/-i-/を脱落させた(あるいは吸収した)ため、軽唇音化を経た音節は直音化し、「浮/vɿu/」「風/fɿuŋ/」「福/fɿuk/」のようになった。

唇音声母と/-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/との結合が極めて不安定な(つまり発音しにくい)ものであったことは、明母がこれらの韻母と結合した場合に、(軽唇音化せずに)直音化したことから窺える。軽唇音化は、介音/-i-/を含み、かつ中舌・後舌の主母音を有するという条件下で一律に起こったが、僅かな例外があり、その例外は流撰と通撰の明母に集中している。「謀」「夢」「目」などである。これらは現代音でも全て m-を保っている。軽唇音化していれば、ゼロ声母(ピンインで w-)になるはずである。これらの例外が生じたのは、つまるところ幫・滂・並母が軽唇音化したのと同じ要因による。唇音声母と/-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/との結合が不安定であったために、破裂音では軽唇音化を生じ、鼻音では(調音時の閉鎖の持続が破裂音よりも長かったために)介音を脱落させたのである。結果としていずれも直音化して、より安定性の強い(=発音しやすい)音素配列になった。

このようにして、流撰と通撰で軽唇音化が起こると、それを契機として、上述の条件下に軽唇音化が広まった。南方方言(白話音)では流撰・通撰と同様に、幫・滂・並母のみが軽唇音化し、明母は軽唇音化しなかったが、北方では明母も含めて軽唇音化し(「武」「亡」など)、現在の状況が出来上がっている。

北方において、流撰と通撰の明母が軽唇音化せず、他の撰においては明母も全て軽唇音化したという事実は、両者の軽唇音化に時間的な差異があることを物語っている。

### 3. まとめ

以上を若干の補足と共にまとめると、次のようになる。

i) 唇音声母/p-/、/pʰ-/、/b-/と韻母/-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/との結合において、声母と韻尾に唇

<sup>2</sup> 実際には、[pʰi-] > [fʰi-] > [f-] のようであったと思われるが、未だそれを検証する手段を持たない。

音が現れることから、異化作用を起こし、声母の閉鎖が緩んで軽唇音化した。漢語の唇音声母は唇の丸めを伴っていた(それゆえ開合の対立がない)ため、円唇的な韻尾との間に異化を生じたのである。

ii) やや遅れて、介音/-i-/と中舌・後舌主母音を有する他の音節においても軽唇音化が広まった。/p<sub>1</sub>ɿu/ > /fɿu/等への類推によって、/p<sub>1</sub>ɿp/ > /fɿp/や/p<sub>1</sub>ɿŋ/ > /fɿŋ/などの変化が起こった訳である。この類推は、中舌・後舌主母音を持つ音節に留まり、前舌主母音を有する音節には広まらなかった。

iii) 最初に軽唇音化を生じさせた/-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/は、鼻音声母/m-/との結合においては軽唇音化を起こさなかった。軽唇音化した/p-/、/p'-/、/b-/と比較して、鼻音/m-/は閉鎖の持続が長いことから、介音を脱落させたものと解釈できる。/p<sub>1</sub>ɿu/ > /fɿu/等の軽唇音化も、/miɿu/ > /mɿu/等の直音化も、唇音声母と/-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/の結合が不安定な(=発音しにくい)ことへの対処であり、現象は異なっても、その要因は同じと言える。

iv) /-iɿu/、/-iɿuŋ/、/-iɿuk/以外の韻母を有する音節に軽唇音化が広まった際には、/m-/もおしなべて軽唇音化した。/p<sub>1</sub>ɿu/ > /fɿu/などの第一波の軽唇音化では、明母は/miɿu/ > /mɿu/のように直音化したため軽唇音化しなかったが、/p<sub>1</sub>ɿŋ/ > /fɿŋ/などの第二波の軽唇音化では明母も/miɿŋ/ > /wɿŋ/のように軽唇音化した<sup>3</sup>。

以上が概要である。異化作用が要因となって音韻変化を起こす類例として、2節において近世音における-m > -n の変化を挙げたが、更に古い時代にも類似の例がある。上古以前の\*\*b が上古音において\*-dとなる変化である<sup>4</sup>。

「内」は諧声系列において「入」や「納」などの-p に連なるが、中古音の韻尾は/-i/である。そこで、出発形として\*\*nuɿb/を想定すると、韻尾/-b/が介音/-u-/との間に異化作用を起こして\*nuɿd/となり、さらに/nuɿi/ となったという説明が可能になる。この種の変化が契機となって、介音/-u-/を持たない音節においても、\*\*b > \*-d の変化が網羅的に起こった。諧声系列上「盍-p」に連なる「蓋」は\*\*kab > \*kad > kai と変化したことになる。

要するに、漢語音韻史においては、音素の増減に関わるような大きな変化のかなりの部分に異化作用(とりわけ唇音性に関連するもの)が影響しているのである。本稿に示した軽唇音化の進行過程も、そのように繰り返し現れる傾向の一つと捉えるべきなのであろう。

参考文献:

平山久雄 1967a, 「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」『北海道大学文学部紀要』15-2.

平山久雄 1967b, 「中古漢語の音韻」『中国文化叢書1 言語』, 大修館書店.

<sup>3</sup> /wɿŋ/は現代語の通常の音韻論的解釈では/uɿŋ/となるが、ここでは軽唇音化が声母の問題である点を意識して/wɿŋ/とした。なお、/m-/が軽唇音化を経て/w-/となるのは北京など東部北方音の変化。西北方言では軽唇音化に続いて起こった非鼻音化により/m-/ > /m̥-/ > /v-/となる。

<sup>4</sup> ここでの-b や-d はカールグレンの表記を用いている。カ氏は音声の実態として有声破裂音韻尾を想定していたようであるが、ここではあくまでも理論的な記号として利用する。つまり、諧声系列において-p と関連するが、中古音で-i になるものとして\*\*b を、また諧声系列において(あるいは詩経の押韻において)-t と関連するが、中古音で-i になるものとして\*-d を用いることにする。